九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性(1)

板橋, 義三
九州大学比較社会文化研究院日本社会文化専攻・日本語教育講座

https://doi.org/10.15017/8635

出版情報：比較社会文化. 7, pp.57-68, 2001-03-01. 九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化』第7巻（2001）57～68頁
Bulletin of the Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
vol.7（2001），pp.57～68

古代日本語とオーストロネシア諸言語における一形態の同源性(1)*

The Morphological Cognateship between Old Japanese and Austronesian (1)

板　橋　義　三**

キーワード：混成言語，指示的代名詞，言語接触，多量（文法）借用

§0. はじめに

古代日本語と琉球語の接辞 i と si についてはアルタイ比較言語学の立場からの研究として Itabashi(1989)，Miller(1989：主格，対格接尾辞のみ言及)があり，オーストロネシア比較言語学の立場からの研究として崎山(1990)があるのみで，他にはこれまで比較言語学的見地から研究されて来なかったし，またその起源や形成過程については特に未開の領域であった．この拙論では接触比較言語学的方法を援用し，その接辞 i と si の形成過程を探ってみる．

Itabashi(1989)で取り扱った i と si の起源をアルタイ祖語に求めようとしたが，実際には十分その機能をアルタイ比較言語学の枠内で取り扱うことは不可能であったと考え，特に古代日本語の多数の i と si の機能はその派生であると考えることは不可能であるという見解に達した．さらに以前からオーストロネシア諸言語の i と si の様々な機能にその類似性を見いだしてはいたが，十分な検証ができないでいた．また Miller(1989)では主格と対格接尾辞のみをアルタイ諸言語と比較し，その起源をアルタイ祖語に未だ求めている．この体系的な i の用法は単に主格と対格接尾辞のみの比較では i と si の体系的な機能が全く見えない．

古代日本語と琉球語の接辞 i と si には様々な機能があるが，その機能はオーストロネシア諸言語に見られる同接辞，代名詞 i と si の機能と酷似しているように思われる．まず，両言語の接辞 i と si のそれぞれの機能を詳細に探り，その類似性を見てみる．その際，分類の一部として接頭辞，接尾辞に分け，さらに名詞と動詞に付く各々の接辞というように分類して記述するが，接頭辞，接尾辞など多数存在するオーストロネシア諸言語では，ある言語の接尾辞が他の言語のその同源の接頭辞に対応することが常にあり，同源であっても接尾辞が同じ接尾辞に対応するとは限らないのである．従って，拙稿ではこのことはすべての項目に言えるのでここで断っておく．

また，それぞれの機能の類似は偶然の一致なのか，借用なのか，または同源なのかを探ってみる．結論としてはこの両言語の接辞，代名詞は単なる偶然の一致や借用等ではなく，同源であると考えられる．

§1. 古代日本語と古代琉球語の接辞 i の様々な機能

接辞 i の様々な用法に入る前に，日本祖語，前日本語におけるこの接辞 i の復元形について述べる．Itabashi(1989)ではその復元形を *-i と考え，アルタイ諸言語の主格，対格接尾辞と比較した．また Miller(1989)ではアルタイ祖語の対格接尾辞を *ñigi と復元しているが，これはその形態をチュルク語の-iγ，古代モンゴル語の-i/口語モンゴル語の-g，古代日本語の-i を基盤にして復元したものと考えられるが，その復元の時点ですでに日本語をアルタイ諸言語の一言語と考えている事自体に問題が存在すると考えられる．従って，古代日本語の-i を基盤にしたことも問題であるとともにその復元形である *ñigi もその場しのぎの感を免れないとともに日本語を強引にアルタイ諸言語の一つに帰着させてしまおうという感が非常に強い．また Miller(1989：286)は一般に古代日本語では母音(V)と接尾辞-i が接続すると，融合を起こし，例えば母音/a/と接尾辞-i が/e_2/に融合縮小してしまうとし，前日本語ではこの主

* この論文は本来，1998年の「語源探究(6)」に掲載される予定であったが，明治書院では1999年6月時点で急遽このシリーズ自体の刊行見直しとなったため，ここに掲載するものである．
この論文の後続(2)，(3)はそれぞれ九州大学言語文化紀要「言語文化論究 No. 11」「言語科学 No. 35」に掲載されている．

**日本社会文化専攻・日本語教育講座

格・対格接尾辞は *-yi と復元している．しかしながら，実際に古代日本語でも古代琉球語でもこの接尾辞-yi が存在した形跡は全くなく，また下記のようにそのほかの要因も特にないため，前日本語では接尾辞 *-yi が存在したと必ずしも考える必要はない．即ち，母音が接続すると必ずしも融合を起こす訳ではなく，その母音間に半母音/-y-/が渡り音として挿入されることがよくあり(田口 1978:407-8)，恐らくどちらの形態をとるか(融合か/-y-/挿入か)はその品詞と接辞との密着度，結合度または接尾辞としての独立度によって決定されていたと考える．ここでは特に不都合が生じない限り，その復元形を *i とし，その直前の品詞の語末母音とこの接尾辞 i の間に半母音/-y-/が渡り音として自然に挿入されたと考える．さらに後に見るように，他の数多くの機能を有する古代日本語の i (と si)を一つの体系として見ることができることとその日本祖語の形態素を *i とすることで，古代日本語の様々な機能とその統一した形態を体系的な一つの枠組みと見ることが可能である．従って，この主格・対格接尾辞のみを他の機能と切り離して孤立させて考えるのは「木を見て森を見ず」ということになり，この i さらには si の形態的・機能的全体像を見失うことになってしまうので，接尾辞-i をこの接辞全体の機能の一部として見ることが最も妥当であると考える．

[1] 人称代名詞用法

[1.1] 二人称代名詞

(a) 古代日本語

二人称代名詞には i の他に na，nare，si，$o_2$re があるが，この i は相手を軽んじて言う場合に使われると言われている．またこの i は例として挙げることが出来るのはその直後に主格接尾辞 ŋga がくる場合のみである．

(1)「いが造り仕え奉る大殿の内...」

[古事記　神武即位前]

「貴様がお作り申し上げている御殿に中...」

(2) いが命またあらずや　[日本書紀　皇極紀２年]

「おまえの命はあるだろうか」

例１では「い」が中期中国語(MC)の伊/ʔi/の表音文字で表されているが，例２では MC の表意文字，爾/ńźię:/で表され，二人称代名詞を意味する．従って，例１のみが二人称代名詞の i を表していると見てよい．拙稿では表意文字で表された代名詞も含めて考えるので，この項でも例１のみならず一般に i と解釈されているものも含めて考える．

この i の例は非常に少なく，この他にもう一つ例が挙げられる程度しか見られないようだが，古代日本語の時代にはすでに生産性は低く，ほとんど使用されなくなっていたのではないかと考える．もしそれが事実であるとすると，この i の形成時期は非常に古いと考えてよいと思われる．しかしながら，この i は指示代名詞としては前古代日本語では生産的であったと見てよいことから，この二人称代名詞の用法は指示代名詞から三人称代名詞を経由して派生し，その後なんらかの理由で軽蔑的意味を持ったその二人称代名詞の用法が衰退したものと考えられる．しかし，その逆方向の派生の蓋然性は非常に低いのでないかと考えられる．それは二人称代名詞の意味領域が三人称代名詞のそれよりずっと狭く特殊化したものであるからである．

(b) 古代琉球語

古代琉球語ではこの i の二人称代名詞の用法が見られないが，古代日本語の同じ人称代名詞 i が一部対応すると思われる前古代琉球語の二人称代名詞 *ire<*i + *re が存在したと考えられる．これは沖縄方言の南部における相手を軽視した二人称代名詞 ya と ʔya から前琉球語として復元したものである．この *ire は北部と南部方言(徳之島，与論島，奄美，与那国など)からの尊敬を表した二人称代名詞の復元形 *ore と形態と意味の点において対をなすが，これから *i が抽出できる．ここではその方言形 ya を挙げておく．

(1) ya ga katʃi bitʃi [沖縄：内間　1984：443]

ya　ga　katʃi bitʃi

[2p. 単数]　[主格]　書く　べき

「お前は（それを）書くべきだ」

古代琉球語では二人称代名詞としての i の例が方言形に見られないし，また古代日本語でもそれほど生産的な代名詞ではなかったので，二人称の用法自体が本来のものではなく一時的に使用された用法である可能性が高いのではないかと考えられる．しかし，逆に二人称代名詞としての用法が本来存在しそれが化石化して行くに従って，その派生的な用法である三人称代名詞の i がそれ以上に急激に消滅してしまう可能性もないことはない．しかしながら，古代日本語の二人称代名詞の節で述べた理由の他に，二人称代名詞と三人称代名詞の生産性から考えると，やはり後者，即ち，三人称代名詞としての用法が本来的ではないかと思う．後に詳しく見るように，i と関係の深いと考えられる si の用法は古代日本語では二人称代名詞としての用法よりも三人称代名詞と指示代名詞として用法が主であり，また i も三人称代名詞としての用法はないが指示代名詞としての用法があり，このような事実に照らし合わせると，i と si は本来三人称代名詞と指示代名詞の区別が本来なく『指示を表す代名詞』のような機能をもっていたことが考えられる．この上記のような事実は逆に i と si が本来二人称代名詞ではなかったことの傍証になるのではないかと思われる．

[1.2] 三人称代名詞

(a) 古代日本語

古代日本語におけるｉの用法は見られないが，指示代名詞の用法のみが見られる．その指示代名詞としての用法は後に詳しく述べる．また後には例を挙げて述べるが，siの三人称単数／複数の用法のみが見られる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語においても古代日本語と同様でｉの三人称代名詞としての用法は全く見当たらない．また後節で言及するが，古代琉球語のｉの指示代名詞としての用法も見られないが，siに名詞用法が一つ見られるのみである．

[2] 名詞群に付く接頭辞

古代日本語や古代琉球語のｉには人称代名詞以外に様々な機能が見られる．これらの機能はそれぞれ独立して全く異なるものではなく上記の代名詞の機能とも深い関係が存在すると見られる．これは全くsiについても同様であるが，それについては次節で詳細にわたって見て行く．これまで先人のほとんどがこれらの機能を独立した，互いに関連のないものとして考え研究してきたが，実際にはこれらはすべて一くくりにすることが可能であり，そのほうがかえって一貫性があるとともにより体系的であるとみられるので，その一くくりの枠組みでそれぞれの機能を見て行くことにする．また接辞においても一貫して「用法」という用語で通すが，これは日本・琉球祖語においては勿論前日本語においても形式としての格形態が存在したとは言いにくいので，この用語を使うことにする．

[2.1] 強調用法

(a) 古代日本語

名詞群に付く接頭辞としての用法は古代日本語にはほとんど見られないが，例として一つだけその可能性があるものがある．その機能は強調と考えられる．

(1) 隠口の泊瀬の川の上つ瀬にい杭を打ち...
[万葉集　3263]
「泊瀬川の上の瀬に杭を打ち...」

この例がひとつあるが，この「い」はMC伊/ʔi/の表音文字で表されている．従って，名詞に接頭辞として付くｉが存在していたことが確認される．この歌の訳ではこの「い」は「斎」の漢字を使用し，「斎み清めた，神聖な」の意味を加え美称としたと考えられているが，この文脈からはその神聖さが感じられないこと，またこの「斎」の読みはもうひとつあり「ゆ」とも読めるが，この「杭」に関してはその読みがないことなどから，特にこの歌に関しては本来強調の意味をもつ「い」が使われていたのがこの「斎」の意味が広がるに従って本来の意味を失った．ついで，ほかの「斎籬，斎串」などのようの用法がその分布範囲を拡大し使われるようになったことから，この「斎」の意味として使用されるように意味上の再分析が起こった，所謂，民間語源と考えられる．崎山(1990：208)にはこの点に関して詳しい説明はないが，同様のことを述べている．

(b) 古代琉球語

古代琉球語では名詞群に付くだけでなく形容詞にも付く接頭辞の用法が見られるとともに動詞群にも付く接頭辞の用法があるので，後者二つは後程例を挙げるが，前者の例を一つ挙げておく．

(1) ʃiForaʃi　i-kotoba-ya...　[琉歌　224]
ʃiForaʃi　i-kotoba-ya
優美な　[強調]－言葉－[詠嘆]
「優美なその言葉...」

このｉはその直後の名詞‘kotoba’を強調したものと考えられるが，後に挙げる形容詞や動詞の場合でも同様である．この場合のｉの機能は名詞の孤立形形成接尾辞-i，即ち，指示・強調代名詞化の機能と全く同じである．

[3] 動詞群に付く接頭辞

[3.1] 強調用法

(a) 古代日本語

古代日本語には接頭辞i-をとった動詞の例が万葉集にたくさんあるので，生産性は割に高かったものと見ることができる．次にいくつかの例文を挙げる．

(1) しただみのい這ひもとほり...　[古事記　神武]
「細螺のようにはい回って...」
(2) 吾が背子がい立たせりけむ...　[万葉集　9]
「愛しいあなたがお立ちになったという...」
(3) 吾が日の皇子のいましせば...　[万葉集　173]
「わが日の皇子がもし御在世であったら...」

例１と例３では「い」はMC伊/ʔi/の表音文字が使用されているが，例２ではMC射/iäk/で表されており，その意味は全く無関係であり，表音文字で表されていると考えられる．従って，ここでは例２の「い」も考慮しながら，例１と例３の表音文字で示されているi-があることから，動詞に付く接頭辞i-が存在したと考えることができる．

このi-がついている動詞とそれに対応するi-がついていない動詞とを比較してみても，このi-の本来の意味は全く失われており，多分その動詞が示す動作や状態の強調または指示する機能ではなかったかと思う．そのように考えることが最も妥当で一貫性があるように見える．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様にこの接頭辞は生産性が高く，多くの

例が見られる．また古代日本語とは異なり，古代琉球語では形容詞にもこのi-が付いた．いくつかの例を示す．

(1) toʃi-ka mitose i-kiyote...

［おもろさうし 12-7(658)］［動詞］

toʃi-ka mitose i-kiyote

年－［属格］三年 ［強調］－招く

「三年目に（女神）を招いた」

(2) mi-inotʃi-no tsuna mi-hoʃi-no tsuna i-jiyoku,...

［南島歌謡(上)0-29-29］［形容詞］

mi-inotʃi-no tsuna mi-hoʃi-no tsuna i-jiyoku

［尊敬］－生命－［属格］綱 ［尊敬］－星－［属格］綱 ［強調］－強い

「生命と星の綱が大変強いので，」

例文１では動詞の直前に付く接辞，あるいは動詞の接頭辞として考えることができるが，意味上ではこのｉを本来三人称代名詞と考え，それを接頭する他動詞を自動詞に変換する機能から発展して単に動詞を強調する機能となったと見られる．前者の場合では，この文の前部分には対象が特定されていないので，このｉを自動詞化する機能と考えられる．また後者の場合であれば，このｉを本来の三人称代名詞と考えず，動詞に接頭する直示名詞の強調機能とも考えることも可能である．前者の解釈も明解であるが，例文２の機能を考慮し例文１との共通の機能として考える時，後者がより妥当な解釈であると考えられる．ついでながら，どちらにしてもこのｉを主格を表す機能とは考えにくい．それはこの文の主語に接尾しないと同時にその動詞の前の名詞がｉの存在にかかわらず格には無関係だからである．

例文２では形容詞に接頭しているので，例文１と同様に主格を表している蓋然性はない．またこのｉは接頭される品詞が形容詞なので，当然三人称代名詞の自動詞化する機能ではない．従って，形容詞に付く直示名詞の強調機能と考えられる．因みにこのような主語や対象を本来の代名詞で繰り返す統語形式はオーストロネシア諸言語では数多く見られる現象のひとつである．

［4］名詞群に付く接尾辞

［4.1］主格・強調用法

(a) 古代日本語

古代日本語には接尾辞として使用された-iは次の三つの機能をもっていたと考えられる．主格・強調機能，処格機能，名詞の被覆形形成機能の三つである．順に次に例を挙げながら見て行く．

(1) 奈良麻呂小麻呂らい逆縞なる共柄を誘い率いて...

［宣命 19］

「奈良麻呂や小麻呂らが反逆者を率いて...」

(2) 在千潟在り慰めていかめども家なる妹いおぼしみせむ ［万葉集 3161］

「ここでこうして心を慰めていこうと思うが，家の妹が退屈するだろうな」

上例二つとも MC 伊/ʔi/の表音文字で示されているので，このような統語的な特徴をもつ接尾辞-iが存在していたと見られる．

例１では「奈良麻呂，小麻呂ら」が，例２では「妹」が主語となり「い」は主格を表している．

また，この「い」がなくてもその直前の名詞が主語であることは統語的に理解されるとともに事実この「い」が脱落している節が多く見られるので，この「い」を主格・強調機能と考えることができる．さらにこの機能の出現頻度から考えて，この機能はこの時期には生産性がだいぶ落ちていたのではないかと考えられる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語のｉは古代日本語のそれとほぼ同じ機能をもっているが，古代日本語には見られない呼格の機能が存在している．即ち，主格・強調，具格，処格，呼格，名詞の被覆形形成機能の五つの機能が見られる．下に主格・強調の例を示す：

(1) ototaru-i kimokarato...

［おもろさうし 14-11(992)］

ototaru-i kimo-karato

Ototaru-［主格］ 胆-から

「オトタルは心から(かわいがられ)...」

「おもろさうし」からは一つのみ例を挙げることが出来るが，この例はこのｉの機能がその前の名詞が主格であることを示していると同時に，また主格を強調していると考えられる．それはこのｉが存在しなくても主格を示しているたくさんの例があるからである．これは古代日本語のｉの機能と全く同じである．琉球語では主格は ga でも表されるのである．

［4.2］処格用法

(a) 古代日本語

(1) 此の国土い経を弘むるに...

［金光明最勝王経：平安初期点］

「この国で／に教えを広めて...」

この例文からこの「い」は現代語の「に」または「で」が対応し，また統語上から見ても処格を表しているといえる．この機能を持つ例文は他には見られず，また古代日本語の初期のものにも見られない．これが平安時代に見られ

るということは古代日本語の初期に実際は存在していたものが文献に現れなかっただけではないかと考えられる．

さらに処格の「に」が「い」を圧倒し「い」の消滅をはやめたのではないかと考えられる（「に」は「い」の派生形であると考える）．またこの例のように後の時代に仏教などの経文などにその古い痕跡を留めていたと考えられる．

以下に述べるように，古代琉球語にはこの i が現れるので，古代日本語にも「い」が存在した傍証になるのではないかと思う．

(b) 古代琉球語

(1) Fukamitʃi-i yaki-no-omoiki-ya matʃiyori...

［おもろさうし　14-15(996)］

Fukamitʃi-i yaki-no-omoiki-ya　matʃi-yori

西の道－［処格］　ヤキ－［所有格］－思い人－［強調］

待ち－いる

「西の道でヤキの思い人が待っている」

上述のように古代日本語にはこの「い」は現れないが，平安の経文にその痕跡を留めて居るが，古代琉球語ではこの{i}が現れる．外間(1981：225)などの学者はこの{i}は{ha}と読むとしているが，伊波の版本を除く他の版本は{i}であるので，これはやはり{i}と読むべきであろう．従って，ここに示したように古代琉球語には処格の{i}が存在したのである．後期古代日本語の「い」と同様に処格「に」との競争に負けてしまい，{i}が消失しその代わりに{ni}が台頭して来たのではないかと考える．

［4.3］具格用法

(a) 古代日本語

古代日本語には具格用法はないようである．

(b) 古代琉球語

(1) katanautʃi-i jakuni toyomiyoware

［おもろさうし　1-5(5)］

katanautʃi-i jakuni toyomi-yoware

刀差し－［具格］　国　響き渡る－［尊敬］

「刀差しで国を轟き渡り給え」

katanautʃi は連用形をなし，名詞的な形態となっている．その名詞形にこの接尾辞-i が付き統語的にも意味的にも一貫性のある文であるためにはこの接尾辞は具格の機能でなければならない．この機能は古代日本語には見当たらないが，これも日本［・琉球］祖語が保持していたものを琉球語が継承したものではないか．その機能がさらに古代日本語では「にて」や「で」が出現しそれとの競合で消失してしまったのではないかとも考えられる．ただこの例からは名詞化したものに接尾辞が添加されている例であり，名詞そのものに添加した例ではないのが幾分気掛かりである．

［4.4］呼格用法

(a) 古代日本語

古代日本語には呼格用法は見られないようである．

(b) 古代琉球語

(1) otomako-i akamako-i okaruna

［おもろさうし　14-17(998)］

otomako-i akamako-i okaru-na

オトマコ－［呼格］　アカマコ－［呼格］

いる－［疑問］

「オトマコ，アカマコ　家にいるのかい」

この例文の otomako，akamako の{-a-}は女性を意味するとされ（外間＆仲原　1967：76），この単語全体で名前を示すと考えられる．しかし後者は未詳となっているが，前者が名前であることからこれも女性の名前であると考えてよいと思う．また okaru も owaru も平仮名で書かれており，okaru は owaru の誤写と考えられるので，「いる」という意味になり，この-i は呼格か主格かの可能性が出てくる．これは呼格が最もふさわしいように思う．それはこの文の直後に続く文，mata ogayaheyori owayorina, ekeri aji（あなたの家からおいでになったのですか？，兄なる領主様）と領主にきいていることから，この直前の文（例文１）は領主が相手に直接尋ねていることになり，『文』と言うより『発話』と考えられるからである．

［4.5］名詞の被覆形形成用法

(a) 古代日本語

(1) みつみつし久米の子らが頭椎い石椎い持ち...

［日本書紀，古事記　神武］

「久米部のものどもが頭椎の大刀を石椎をもち...」

この例文の「い」は両方ともに MC 伊/ʔi/の表音文字で表されていたので，このような統語的な特徴をもつ接尾辞-i が存在したと考えてよい．

以前拙論（1989，1990）ではこの接辞を対格機能の接辞としたが，Vovin（1997：281）が指摘したように，これは「つつい」の名残りの「い」と考えてよい．また川端(1997：26-27）も同様に考えており，これは被覆形形成接辞 i であり，最終的に「つち」（tutu-i>tuti）に変化したと考えられる．さらに，もしこの「-i」が対格接辞であるとすると，それが同じ節に２度出現することになるので対格接辞であるとは考えにくい．またもう１つ，これが対格接辞であると考えにくい理由はこの同じ名詞句が記紀に幾度もくりかえし現れることであり，他の名詞の例が存在しないからである．従って，この接辞「-i」を被覆形形成接辞と考えるのが最良である．因みに「頭椎い石椎い」をそれ

ぞれ一つの名詞と考える説もある（時代別 1985：65）．さらにこの機能の出現頻度から考えて，この機能はこの時期にはすでに化石化していたのではないかと考えられる．

(1) saka-「酒」+i> $sake_2$

(2) ama-「雨」+i> ame_2

これは名詞そのものの形態素がそれ自体では存在し得ず常に i という被覆形形成接辞を添加することを必要とする．本来はこの接辞が添加されなくても名詞として独立し得たのかもしれないが，上記のように i を添加して自立した名詞として存在する．これは下記に見るが，琉球語にも同じ現象が見られる．

(b) 古代琉球語

(1) saka-「酒」+i>*$sake_2$>sake

(2) ama-「雨」+i>*ame_2>ame

この機能は古代日本語のそれと全く同様であるが，古代琉球語の場合には被覆形も露出形も両方存在する名詞とそうでないものがあり，その名詞によって異なるのが古代日本語との大きな違いである．例を挙げると以下のようなものが目に入る．

(1) ama-kasa 「雨傘」 [混効験集 坤－乾坤]

(2) ama-koFi 「雨乞い」 [南島歌謡大成 沖縄篇上 オ38-2]

(3) ama-dare 「雨垂れ」 [南島歌謡大成 沖縄篇下 全2713]

(4) ami-gumu 「雨雲」(=ame-gumo) [南島歌謡大成 沖縄篇上 ウ415-8]

(5) ame-komori 「雨小堀」 [南島歌謡大成 沖縄篇上 ミ6-36]

(6) ami-tari 「雨垂れ」(=ame-dare) [南島歌謡大成 沖縄篇下 天560]

一般に上記の例(3)と(6)のような ama-と ame-が同じ形態素に付くということはほとんどないようだが，上記の他の例をみても分かるように，異なった形態素と結合するとみてよいと思う．これは sake にも当てはまる．しかし，その結合の規則［どの形態素が ama-/ame-のどちらに付くのか］はないように見える．可能性として考えられるのは古代日本語の ama-系から借用されたのではないかと考えると同時に，一般に露出形が古い形態を保っていると考えられるから，この例もその一例であるので日本［・琉球］祖語から琉球祖語に分岐した後，古代琉球語ではすでに被覆形にすべて変化してしまい露出形は存在しなかったと見ることである．即ち，古代琉球語では ama-の露出形がなく，ame-/ami-[<ame]の二つの系列があったと見られるが，ame-/ami のどちらも本来被覆形で露出語を兼ねるようになったのではないかと考えられる．今のところこの考えを裏付ける文献は上がっていないが，その可能性は大いにあると考える．

意味の変化を考慮してみると，露出語は単語ではなく形態素であることからくる意味のあいまいさがあり，それだけでは意味をつけること自体不可能であるが，ただこれに付く語が「雨」と直接関係のある意味をもつことだけが分かる．それに対して被覆語はそれ自体形態素であると同時に単語でもあるので，その語は意味が明確になる．これは他のこのような対になっている形態素にも同じ原理が働く．

これまでの名詞群に付く接辞をまとめると，これらの接辞の共通した機能は『指示的または直示的／強調的機能』といえるのではないかと思う．

[5] 動詞群に付く接尾辞

[5.1] 述部導入接尾辞

(a) 古代日本語

まず２，３例を挙げ，その形態を見てみる．

(1) kak-+i>kaki- 「書き」

(2) tat-+i>tati- 「立ち」

(3) kög-+i>kögi- 「漕ぎ」

この接尾辞-i は四段，上一段，上二段活用，不規則動詞にのみ適用できる形成法であるが，この形成法は非常に古くから存在していた痕跡の一部であると考えられる．伝統的な文法用語では連用形形成語尾ということになろうが，動詞から名詞を形成する名詞形成接尾辞とみることもできる．しかしながら，もしラ行変格活用動詞に接尾辞（活用語尾）-i が付いた終止形，例えば，'ar-i'や'wor-i'などが四段活用動詞に接尾辞(活用語尾)-u の付いた終止形，例えば'tat-u'などよりも古く，より基本的な形態であると考えると，この接尾辞-i は述部導入機能とも考えられる．それはこの接尾辞-i が文を終止させることができるからである(cf. 松本 1995：162-5)．この機能は上記の名詞形成接尾辞と相反する機能と一見見えるが，古代琉球語の述部導入接尾辞の所で述べるが，この機能を『名詞句型の述部導入機能』と考えると，一見矛盾と思われるこの接尾辞-i の機能を難無く解決できるのでここではこの接尾辞の機能とする．その理由としてはその方が上記の形成法や下記の形成法をより統合した動詞体系の一部としてや上述した名詞の露出形と被覆形の関係と同様なものとして見ることができるからである．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様に，まず例をいくつか見てみる．

(1) kak-+i>katʃi- 「書き」
(2) num-+i>numi- 「飲み」

古代琉球語では一段と二段活用動詞にのみこの述部導入接尾辞が見られる．これも古代日本語のそれと同様に非常に古い形態素 i の痕跡であろう．またラ変動詞の終止形も古代日本語と同様に接尾辞-i で終わり，四段動詞の終止形と比較して，ラ変動詞のそれの方が基本的な形態であると考えられるので，この接尾辞-i は述部導入機能であると考えられる．

古代日本語と古代琉球語のこれらの共通した接尾辞の機能を見ると，日本（・琉球）祖語では述部導入機能が同時に連用形の名詞化接尾辞であった蓋然性が高く，その統語構造はA＝B（A，Bは名詞類で，Bが接尾辞-i をもつ用言）という名詞句で終止する最も簡素な形態をとったのではないかと思われる．このことはとりもなおさず，いわゆる連用形と終止形（-i で終止するものを基本とする）の接尾辞-i が本来同源であったことを意味すると考えられる．

[5.2] 已然形形成用法

(a) 古代日本語

四段活用動詞の已然形(命令形も同様)-e_2 は未然形形成接尾辞-a と已然形形成接尾辞 -i との結合によって形成される．例をみてみると，

(1) *kak-a-[未然形：他動詞]+i>kake$_2$- 「書け(ば)」
(2) *tat-a-[未然形：自動詞]+i>tate$_2$- 「立て(ば)」

この已然形形成接尾辞-i は①の述部導入／名詞形成接尾辞-i と同源であろうと思われる．また未然形形成接尾辞-a が已然形形成接尾辞-i に対する関係は名詞の露出形-a がその被覆形-i に対する関係と全く同じである：

kak-a; kake$_2$-(<kaka+i)=am-a; ame$_2$(<ama+i)

動詞のこの接尾辞は「不定的でありまた範疇的」と特徴づけられるのに対して，名詞のこの接尾辞は「一定的でありまた特定的」と言った言葉で特徴づけられる(松本 1995：166)．このような意味付けによって已然形形成接尾辞-i は指示／強調機能であると考えてよい．例えば，

(1) 入り日さしぬれ$_2$ [万葉集 135]
「入日がさしたので」

この文における「さしぬれ$_2$」は強調呼応「こそ」を伴うべきであるが，伴わずにその動詞の已然形のみで表現している．これは已然形の本来の機能が，ちょうど名詞であればその被覆形が示すようにその動詞の語幹を自立語にすると共に強調するといった機能をもっていたことを暗示している．

(b) 古代琉球語

古代琉球語においても四段活用動詞の已然形（命令形も同様）-e は未然形形成接尾辞-a と已然形形成接尾辞-i との結合によって形成される．例えば，

(1) *ik-a-[未然形：自動詞]+i>ike- 「行け(ば)」
(2) *mat-a-[未然形：他動詞]+i>mate- 「待て(ば)」

これらの例から分かるように，古代日本語の已然形形成接尾辞の意味，用法ともに全く同じであると言える．

[5.3] 命令形形成用法

(a) 古代日本語

古代日本語にはこの接尾辞は見られないが，中世日本語の中に次のような例が見られる．

(1) お酌に参らいとの御諚なり [御伽草子：子栗絵巻]
「お酌に来なさいとおっしゃっている」

この命令用法は江戸時代初期からのものであるが，多分これが話言葉的な用法であったため古代日本語にあらわれなかったと見られる．一般に「参る」という動詞の命令形は{maire$_2$}であるが，この例では{maira-i}であり，{maira-}という未然形が見え，已然形の形態{-e_2}が形成される以前の形態{-a-i}であることが確認される．即ち，この例における形態は已然形が形成される前の形態が江戸時代初期にも維持されていたことを示しているものと考えられる．

また，現代の方言にはこの命令の機能があるものがある．例えば，この拙稿の著者の方言である東北の仙台方言では命令形形成接尾辞-i(n)があらわれる：

(1) og-a- 「置く：未然形]+i(n)>ogai(n)
「置いてください」
(2) haʃir-a- 「走る：未然形」+i(n)>haʃirai(n)
「走ってください」
(3) mi-r-a- 「見る：未然形」+i(n)>mirai(n)
「見てください」
(4) ud-a- 「打つ：未然形」+i(n)>udai(n)
「打ってください」

この接尾辞-i(n)は個人差があり口母音/-i/から鼻母音/-ĩ/，そして/-in/[iŋ]の３種類があるのではないかと見られるが，このうちの口母音が最も発達したものに見える．即ち，/*-i-n/>/-in/>/ĩ/>/i/という発達をとげて形成されたものと考えられる．/-i-n/のこの/n/はある種の接尾辞であると思われるが，その機能については全く現在のところ不明でありここでは深入りしない．

このような方言形はその方言特有の発達形である可能性もあるので，その方言形のみでもって命令／依頼の機能をもつ接尾辞-i が古代日本語に存在したことを即断するつもりはない．しかしながら，この接尾辞はこの方言の二次的

発達形である可能性は極端に低く，またその形態の命令機能は古代日本語のそれの痕跡ではないかと考えられる．それは古代日本語または日本祖語においてこの方言では動詞の語根に未然形-a が付き，その直後に接尾辞-i が付いた形態［已然形と命令形は同形の語幹］がそのまま現在まで残存したのに対し，共通語ではそれが音韻変化を起こし，{-a-i}が{-e_2}に変化してしまったと考えられるからである．これを図式化すると次のようになる：

	語根	語幹[未然形]	語幹[已然形/命令形]
仙台方言：	kag-[書く]	kag-a-	kag-a-i-
共 通 語：	kak-[書く]	kak-a-	kak-e_2<*kak-a-i

この中世日本語の例や方言の例からこの命令の機能をもつ接尾辞-i は古代日本語にも存在していたであろうと思われる．またこの接尾辞は古代日本語ではまれな存在ではなく生産的なものであったろうと考えられる．またこの接尾辞の機能は已然形のそれと同じであり，指示・強調的な機能をもち，この機能は命令形においても特に抽象化されてはいるものの，二人称の対象に対して働きかけることからこの機能は已然形のそれよりも明確に理解される．形態論的には已然形の接尾辞と同じなので，名詞化する機能をもっていたと判断する．

(b) 古代琉球語

古代琉球語には命令形形成用法は見あたらない．

[5.4]完了結果状態形成用法

(a) 古代日本語

古代日本語では次のように動詞だけでなく形容詞や名詞類から完了した状態の継続形を形成する接尾辞-i があったと見られる：

(1) *tata-[未然形：四段自動詞]+i>tate$_2$-
「立てる」：下二段他動詞

(2) *nura-[未然形：四段他動詞]+i>nure$_2$-
「濡れる」：下二段自動詞

(3) *taka-「高：形容詞」+i>take$_2$-
「長ける」：下二段自動詞

(4) *yo$_2$ko$_2$「横：名詞」+i>yo$_2$ki$_2$-
「よける」：上二段自動詞

形容詞や名詞類に関しては既に言及しているので，ここでは触れない．動詞のみに集中して分析する．この接尾辞による派生動詞は他動詞的なものが非常に多く，この接尾辞-i が自動詞は他動詞に，他動詞は自動詞に変化させるような機能をもっているかのように見える．「自動詞的」から「他動詞的」な変化をとげたのは本来の完了結果状態を表す文が能動的に再分析されたためであると思われる．例えば，'tata nama-i'「盾並め」の本来の意味は「盾が並んでいる／並べてある」であったものが「盾をならべる」というように能動的に再解釈されたためである．古代日本語にはこのような本来の完了結果状態の意味をもつ動詞が少数ではあるが，存在しており（例えば，'wara-i'「割れている」'toka-i'「解けている」），本来の接尾辞-i の機能が『完了した結果状態の継続』であった傍証にもなる(松本　1995：163-5）従って，四段動詞(例えば，tat-i「立ち」）と二段動詞（例えば，tata-i>tate$_2$「立て」）の連用形はそれぞれ基本的述部導入形と派生的述部導入形であり，この二種の動詞は本来一つの動詞に遡るといえる（cf. 川端　1979：337；松本　1995：165-6）．

(b) 古代琉球語

古代日本語と同様，次のように動詞だけでなく形容詞や名詞類から完了した状態の継続形を形成する接尾辞-i があったと見られる．次にいくつかの例を見て見る．

(1) *tata-[未然形：四段自動詞]+i>tate-
「立てる」：他動詞

(2) *tuka-[未然形：四段自動詞]+i>tuke-
「付ける」：他動詞

(3) *taka-「高：形容詞」+i>take-　「長ける」：自動詞

(4) *aka「赤：名詞」+i>ake-　「あける」：自動詞

古代琉球語の例1と2ではこの用法は古代日本語と同様なことが言える．全体的にこのような用法は少ないようであるが，接尾辞の付いた動詞はその動作が完了しその状態が保持されているものを表す．琉球語でも自動詞をそれに対応する他動詞へと変化させているのはその本来の完了した結果状態文が能動的に再解釈されたことを意味している(松本　1995：165)と考えて間違えないと思われる．

[6] 指示詞用法

[6.1] 指示詞

(a) 古代日本語

まず次の例文をみてみる．

(1) 新世に共にあらむと玉の緒の絶えじ<u>い</u>妹と結びてしこと果たさず..［万　481］
「新たになっていく世に共に生きて行こうと二人の中は決して絶えまい(その)妻よと，互いに約束したその言葉を果たさず..」

(2) 花待つ<u>い</u>間に嘆きつるかも　［万　1359］
「その花を待つ(その)間におのずとため息がもれたことよ」

(3) 春風に乱れぬ<u>い</u>間に見せむ子もがも　［万　1851］
「春風に乱れてしまわない(その)うちに見せる子があればいい」

この「い」は例1では MC 射/iäk/の表音文字で表されており，また例2と例3では MC 伊/ʔi/の表音文字で表

されている．どちらにしてもこの統語的特徴をもった i-が存在したことがわかる．

この用法は琉球語には見られず日本語のみにしか見られないが，その特徴は代名詞が常に連体形の動詞とその後の名詞に挟まれるという統語的特徴をもっている．即ち，その i の直前の動詞がその i を含むその直後の名詞を修飾し，その i がその直後の名詞を修飾，強調しているといえる．従って，意味的にはこの i はその直前の動詞節に言及する指示用法である．指示形容詞的用法と考えられる．

しかしながら，これはまた「事実」などを表す意味をもつ抽象名詞とも考えられるという説もある．その場合にはこの抽象名詞は本来の強調・指示的用法から独立して発達したものと考えられ，もしそれが検証されれば，次の節で述べる名詞の類に分類されることになるが，次の節の用法とは統語的に異なるので，ここでは独立した別の用法と考える（次節参照）．

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはこの用法は見られないようである．

[7] 名詞用法

[7.1] 名詞

(a) 古代日本語

前節の用法とは統語的に異なっているが，まず次の例文をみてみる．

(1) 此をたもついはほまれを招きつ　[続宣命　45]
「これ(帝の位)を保つものは名誉を得る」

(2) 捨つるいはそしりを招きつ　[続宣命　45]
「それを保てないものは身を滅ぼしてしまう」

上述の例文のどちらの「い」も MC 伊/ʔi/の表音文字で表され，このような統語的な特徴を有する i が存在したと考えられる．

この名詞用法では例文からも分かるように，i の直前に動詞節が位置しそれが i を修飾する統語的な配置をしている．つまり，この i を名詞として解釈しなければならず，例文の現代語訳から分かるように，「もの」と訳せるが，「人」の意味も「物」の意味もあり，どちらの訳も可能である．

この用法は[6]の用法と同様，琉球語には見られないようであり，古代日本語のみに見られるが，反対に類似の名詞である si は古代日本語には見られず，古代琉球語のみに見られるという違いがあるようである．またこの用法は古代日本語でさえもその例はほとんど見られず，この宣命の用法のみが見られるようである．その点から考えると，この用法は非常に古いものであり，それが古代日本語の初期の段階にはすでに化石化してしまっており，それが痕跡となって残存していると考えられる．

この訳のどちらが本来の意味であるかは決定しがたいし，またこのどちらも本来の意味ではない可能性もあり，このどれをとってもそれを決定づける証拠は存在しない．従って，現段階では不明といわざると得ないが，オーストロネシア語族の様々な言語の指示的用法の i の酷似した例と比較して考えられること(Itabashi 1998)は第三の可能性，即ち，「人」「物」以外の意味からの派生も十分可能性があり，もし指示／強調といった意味から「人，物」に派生したとすると，その蓋然性も高いのではないかと思われる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはこの用法は存在しないようである．

§4. 古代日本語と古代琉球語の接辞 si の様々な機能

[1] 人称代名詞用法

[1.1] 二人称代名詞用法

(a) 古代日本語

二人称代名詞には na/i/si/$o_2$re があるが，それぞれ異なった文体レベルにおいて使われる．ここにおける si の用法のみを記すが，まず例文を見てみる．

(1) しこれをばおれという［日本書紀　神武:即位前紀］
「あなたはこれをおれという」

この例文の「し」は MC 爾/ńźię:/の表意文字で表されているとされており，その意味は二人称代名詞「あなた」である．しかしながら，この語頭の/ń-/が弱化し，さらにその直後の子音/-ź-/が無声化していたら，これ全体が/sie:/に非常に近くなり，表音文字としても機能したと考えてよいことになり，その可能性も大いにあると見られる．従って，二人称代名詞の機能をもつ「爾」が/si/またはそれに近いものであったかどうかは即断できないが，その蓋然性は高いと見る．もしそうであれば，二人称代名詞の機能をもつ si が存在したと考えてよいであろう．

他に例が見当たらないが，この例から si の用法には二人称単数の用法があり，この例では指示詞ではないことは明らかである．これは他の二人称代名詞と比較し，また三人称代名詞にも si があることから，この si の二人称代名詞としての用法が本来のものであるとは考えにくいので，二次的に三人称代名詞から発達してきたのではないかと考えられる．その逆の方向の発達も考えられなくはないが，その蓋然性は低いと思われる．それは間接的ではあるが，史的変化の類型から一般に三人称から二人称への変化が圧倒的に多く見られ，事実，si の用法においても三人称の時より意味が特殊化し狭くなっていることからも，その変化の方向性が窺われる．

(b) 古代琉球語

古代琉球語には二人称代名詞の用法は全く見られないようである.

[1.2] 三人称代名詞用法

(a) 古代日本語

古代日本語では三人称代名詞の用法が見られる. 二人称の用法をもつ i は三人称の用法は見られないのに対し, それと対応する si は二人称代名詞と三人称代名詞の両方の用法をもつ. その例をいくつかを示す.

(1) 美しくしが語らへば... [万 904]
「可愛らしく(私の子供)がいうので...」

(2) しが申ししことは... [続宣命 28]
「彼(仲麻呂)がいうには...」

(3) しが仕へ奉る様に従いて... [続宣命 24, 48]
「その人のお仕え申し上げる様に従って...」

上例の各々の「し」を表すMCの漢字は異なり, 例1では MC 志/tśi-/の表音文字のみで表されているのに対して, 例2では MC 之/tśi/の表音・表意文字の両方をもつ漢字を用い, その機能は指示詞と三人称代名詞である. 例3では MC 自/dz'i-/「自身」の表音文字と考えられる漢字を用いている. 従って, 少なくとも例1と例2の2例だけからもこの機能をもつ si が存在したと考えてよいと思われる.

すべての例が三人称単数を示しているが, すべて人間を指していることから指示詞用法ではないことが明白である. この用法はこのほかにも数多く見られるが, 本来の用法ではなかったかとみられる. 日本祖語ではたぶん三人称などの人称代名詞と指示詞の用法の区別がなかったと考えられるが, それは指示詞の用法 (下記参照) も同様に見られるからである.

(b) 古代琉球語

古代琉球語にはsiは見られず, 指示詞の *kare に取って代わられているが, これは *ka+*re に遡ると考えられる. 古代日本語の三人称代名詞 si と同形態をもつ古代琉球語は見当たらないが, 古代日本語の一, 二人称代名詞 i と同形態をもつ古代琉球語は二人称代名詞の *ire の *i のみである.

[2] 名詞群に付く接尾辞

[2.1] 強調用法

(a) 古代日本語

siの接辞としての用法は接尾辞のみであり, 接頭辞は古代日本語にも古代琉球語にも存在しないようである. さらにその接尾辞も古代日本語のみに存在している. 次の例を見てみる.

(1) 寄り寝し妹を露霜の置きてし来れば, [万 131]
「寄り添って寝た妻を置いて来たので, 」

(2) 君をし思えば寝ねかてぬかも [万 607]
「君を恋しく思っているので, 私はなかなか寝付かれない」

(3) ほととぎすこゆ鳴き渡る心しあるらし [万 1476]
「ほととぎすがここを鳴いて渡る. ほととぎすにも心があるらしい」

例1と例2の「し」は表音文字の MC 之/tśi/で, 例3は表音文字の MC 四/si-/で表されている. 従って, 上例のような統語的な特徴をもった si が存在していたと考えられる.

接尾辞としての si の例は他にたくさんあるが, この接尾辞の用法は強調と考られ, 他の用法はないようである. この強調用法の特徴は上例に見るように名詞群だけではなく動詞群にも接尾辞として付くことである. この接尾辞で興味深いことはこの接尾辞を表すのに「之」という漢字が使われ, この漢字の意味は後の「ぞ」や「こそ」と類似することである. しかしながら, 統語的には「ぞ」や「こそ」は文を終止させることができるのに対し, siにはその機能がないという相違がある. この事実は i と異なり, この接尾辞 si は形態・統語的にその直後の述部に影響を与えることがなく, その直前の名詞群や動詞群を強調, 指示する機能である.

起源的には指示詞の si が一説としてあるが, その機能には相違があるとされ, 意味的には上述の「ぞ」や「こそ」と同じである. しかし, この説は有力なように思われる. 確かにその機能には相違があるが, それはあるものから発達したものであればその機能に変化があるのが当然であって, 本来の指示する機能はこの強調機能によく表されていると考える.

(b) 古代琉球語

上述のように古代琉球語には強調用法は見当たらないようである.

[3] 指示詞用法

[3.1] 指示詞

(a) 古代日本語

まず次の例文を見てみる.

(1) さしぶをさしぶの木しが下に生いたてる...[古事記 仁徳]
「そのさしぶの木, その下にはえている...」

(2) 葉広ゆつ真椿しが花の照りいましし葉のひろりいますは大君ろかも
「葉の広く美しい椿が繁茂しているが, その花の照

り輝くように，その葉の寛にあるように，我が大君は立派におわしますことである.」［古事記　仁徳］

(3) 老人も女童児もしが願ふ心足ひに撫で給ひ治め給へば...　［万　4094］
「老人も女も子供もその願う心の満足するように愛撫なさりお治めになるので...」

例１と例２の「し」は表音文字の MC 斯/sie̯/で表され，例３では MC 之/tśi/で表されている．従って，上例の機能をもつような si が存在していたと見ることができる．

上例はどれも「それ」と言い直すことができ，指示詞としての機能を表している．ここでの訳から指示詞「そー」に対応しているが，原文では「が」がその直後にきている．「が」は属格機能を示しているので，si は全く「そ」と同じであると解釈できる．即ち，si の直前または前出のものを指し示している：例１では「さしぶの木」，例２，３では「椿」．例１，２では直前のものを，例３では前出のものを指している．

この si の用例は非常に少ないが，それは「そー」系によって取って代わられたからであると考えるが，この si の用法は本来生産的であったと考えられ，「そー」系がその機能を拡大するに従って，この si の機能も徐々に特殊化してきたのではないかと見られる．

(b) 古代琉球語

この用法は古代琉球語には見られないようである．

[4] 敬称名詞用法

[4.1] 敬称名詞

(a) 古代日本語

この敬称名詞用法とは「お方」と言う意味をもつ名詞が連結詞「の」を介して「～のお方」と言う言い方を取ることであるが，古代日本語ではこの用法は見当たらない．次の琉球語にのみ見られる用法である．

(b) 古代琉球語

この敬称名詞は抽象名詞の一種であるが，その用法としては必ずその直前に連結詞「の」を伴い，接尾辞的な形態を取る．しかしながら，si そのものに語彙的な意味を備えているので，ここでは接尾辞とは考えず名詞として扱う．まず用例を見てみる．

(1) ちやなのしは，ねいしやり,...［おもろ　15-48(1099)］
ちやなーのーし　は　ねいしやり
謝名ー[連結]ーお方［題目］音頭をとって
「謝名村のお方は音頭をとって...」

(2) たうのし，なむちや，こかね，もち，みちゑる［おもろ　15-48(1099)］
たうーのーし　なむちや　こかね　もち　みちゑる
堂ー[連結]ーお方　銀　金　持ち　満ちる
「堂村のお方は金，銀を満ちるほど持ち...」

(3) きせのしやわかおとちや...［おもろ　17-7(1181)］
きせーのーし　や　おとちや
喜瀬ー[連結]ーお方　や　兄弟
「喜瀬村のお方や私の兄弟...」

古代日本語はこの用法を持たないが，i という指示詞や si という三人称代名詞，指示詞を持つが，後者の用法に非常に近いだけでなく，これから発達した用法ではないかと考えられる．それは古代日本語の三人称代名詞用法は古代琉球語の敬称名詞用法とともに指示詞的な用法で共通しており，前者は後者よりもその語彙的意味の範囲が広く，意味がより特殊化されていないからである．琉球語においてこのような同じ意味上の史的発達が見られる．即ち，*ire の *i と∫i「し」は形態的に同じなだけでなくお互いに語源関係をもつと考えられる．

*ire<*i[三人称]+*re[接尾辞]：前琉球語
∫i「方」(敬称)<*si　：前琉球語

上例すべてにおいて「し」は敬称を示しその名詞句全体が「謝名村，堂村，喜瀬村出身のお方」(一般にはその村の長）という意味からさらに特殊化しその人の名前となり通称として使われる．

最後に i と比較して si には語に接尾する形態のみを持ち，接頭する形態（接頭辞など）を持つものは全く見当たらないのも一つの特徴と考えられる．また大野(1962：502-3）が指摘しているように，si は条件句にもちいられるが，その直後の節が推量，希望，勧誘などの助詞や助動詞であることから，si は話者が控えめな気持ちを表す機能を有していると見られる．即ち，これは si による対象があまり限定されていないためにその非限定の部分に話者の気持ちが入り込むことができる（崎山　1990：211）ということを意味しているように見える．

以上が古代日本語と古代琉球語における i と si の機能すべてであるが，i の機能に比べて si のそれはずっと数が少ないのが特徴的である．i と si のそれぞれの機能領域の境界が必ずしも明確に浮かび上がってこないが，i は対象が特定的，限定的であると考えられるのに対して，si は対象が非特定（全体）的，非限定的であると見ることができるのではないかと考えられる（cf. 崎山　1990：211）．

橋本（1973：143-5）は i と si の関係について次のように述べている．二人称代名詞の「イ」が本来「汝」の意味であったとすれば，前述の「イ」とは関係がないとするが，日本語では指示代名詞を人称代名詞に用いることがしばし

ばあるので，あるいは「イ」はもとは指示代名詞ではなかったかと考えている．古代日本語において「それ」を意味する代名詞「し」があり，また次のようなサ行子音の脱落したものが時々あるので，「い」がもと指示代名詞で「し」と関係のあるものと推定してもそれほど問題にならないのではないかとしている．

え(兄)……せ(兄)　　うゑ(据)…すゑ(据)
あめ(雨)…こさめ，むらさめ　　うゑ(植)…すゑ(植)
いね(稲)…しね　　うつ(棄)…すつ

さらに，「い」に指示する機能があったとすると，接頭辞（i+V/N）としてまたは間投助詞（節+i+N）としての「い」もまたこれと同じもので，どちらも指示・強調のために添えられたもので，独立詞が後に助詞になったものとみなせるとしている．また主格を表す格助詞の「い」も本来これと同じもので，ただ，指示し強めるために用いられたものが後に主格を表すものになったと考えるとしている．

即ち，橋本はこれらのｉとsiは本来指示・強調の機能をもち，それが次第に分化したと考えている．これは拙稿で扱ったｉとsiの機能の考え方と基本的には全く同じであり，恐らくそのように分化してできたのであろうと思われる．その裏付けの一つとして拙稿の最後の節で述べているが，上記の「え」と「せ」の対が同じようにオーストロネシア諸言語にも見られ（崎山　1990：210-2），これはｉとsiが単に/s-/が脱落してできたのではなく，逆に指示的な代名詞 *i に子音/s-/ が添加されて *si が形成されたのである．従って，古代日本語のｉとsiの関係は非常に類似しているものの，上述したように限定性，特定性において異なっているのであると考えられる．

参考文献

飯田季治．1937『日本書紀新講（上，中，下）』，明文社
板橋義三．1990「古代韓国語の人称代名詞の起源について」，言語科学（九州大学言語文化部紀要）No. 25
梅松安＆大塚龍夫．1934『古事記全釈』，国民教育社
大野晋．1957『日本語の起源』，岩波書店
川本嵩雄．1978『南から来た日本語』，三省堂
川本嵩雄．1980『日本語の源流』，講談社
釘貫亨．1997『古代日本語の形態変化』，中央書院
西郷信綱＆外間守善．1972『おもろさうし』，日本思想体系18，岩波書店
崎山理．1990「古代日本語と原オセアニア語の指示詞の体系」『アジア言語と一般言語学』206-219頁，三省堂
田口信之．1978『日本語の語源』，角川書店
鳥越憲三郎．1968『おもろさうし全釈』，全五巻，清文堂
中原善忠＆外間守善．1965『校本　おもろさうし』，角川書店
中本正智．1983『琉球語彙史の研究』，三一書房
橋本進吉．1973『助詞・助動詞の研究』，岩波書店
服部四郎．1959『日本語の系統』，岩波書店
平山輝男＆中本正智．1964『琉球与那国方言の研究』，東京堂
福田昆之．1989『日本語とツングース語　改版』，FLL
外間守善．1981『日本語の世界』，中央口論社
外間守善．1988『おもろさうし』，岩波書店
松本克己，1995『古代日本語母音論』，ひつじ書房
ミラー，ロイA. 1981『日本語とアルタイ諸語』，大修館書店
ミラー，ロイA. 1982『日本語の起源』，筑摩書房
村山七郎．1950「古代日本語における代名詞」，言語研究No. 16，pp. 40-7
村山七郎．1962「日本語のツングース的構成要素」，民族学研究No. 26-3，pp. 157-167
村山七郎．1975『日本語の研究方法』，弘文堂
村山七郎．1981『琉球語の秘密』，筑摩書房
村山七郎．1995『日本語の比較研究』，三一書房
山田実．1981『奄美世論方言の体言の語法』，第一書房
Akiba-Reynolds, Katsue 1984 “Internal reconstruction in pre-Japanese syntax”, Jacek Fisiak (ed.) Trends in Linguistics, Studies and Monographs 23, Historical Syntax, New York: Mouton Publishers, pp.1-23
Aston, W.G. 1988 Nihongi, Tuttle
Itabashi, Yoshizo 1989, “The Origin of the Old Japanese Accusative Case Suffix i”, Ural-Altaische Jahrbücher, Neue Folge, Band 9 pp.152-177
Itabashi, Yoshizo 1991, “The Origin of the Old Japanese Genitive Case Suffixes *n/na/nö/ŋga and the Old Korean Genitive Case Suffix *i”, Central Asiatic Journal 35/3-4 pp.231-278
Itabashi, Yoshizo 1993, “A Comparative Study of the Old Japanese and Korean Nominative Case Suffixes i with the Altaic Third Person Singular Pronouns”, Central Asiatic Journal 37/1-2 pp.82-119
Itabashi, Yoshizo 1997 “Are the Old Japanese Personal Pronouns Genetically Related to Those of the Altaic Languages?”, Acta Orientalia H.Tumus L(1-3) pp.117-146
Itabashi, Yoshizo 1998 “The Old Japanese Personal Pronouns as an Etymological Problem”, Eurasian Studies Yearbook 70, pp.123-154
Martin, Samuel 1987, The Japanese Language Through Time, New Haven: Yale University Press
Miller, Roy 1989 “Old Japanese i” in I.Hijiya-Kirschnereit und J. Stalph, eds. Bruno Lewin zu Ehren, Festschrift aus Anlass seines 65. Geburtstages, Bd. I, Japan, Sprach-und literaturwissenschaftliche Beiträge pp.251-291
Vovin, A 1997 “On the Syntactic Typology of Old Japanese”, Journal of East Asian Linguistics 6, pp.273-290